

北越雪譜初編卷之下

目録

洪海川をかへつさず 奥上下

鮭の食用

鮭を捕る打切並列

漁夫の溺死

鮭漁の類術

人家の毒氷

滝の氷柱

寒行の威徳

關山村の毛塚

泊り山の犬猫

鮭の字考

鮭を出る所並 鮭始終

撥網

千曲川の総滝

鮭の洲走り

笈掛岩の氷柱

雪中の寒行

雪中の幽霊

雪中鹿を追ふ

山言語

童の雪遊び

雲の座願を降も

通計二十三條

越後奇跡録 五卷 鈴木牧之編撰

近刊 京山人百樹刑定

此書は越後七不思議の相説并小圖名所回跡の支跡并圖
國中温泉の圖并主治山川勝景の圖説並古人物名譽を
傳授の餘種々の奇談其地を踏尋其事蹟見ざるごとく
記たる假字文の書なり

京水百鶴画圖

干此氏葉の餘地在り寧ろ其書を以て其の書名
を標して大方の諸君不報し刻し先ん其の好評を祈る

書肆 文溪堂謹識

北越雪譜初編 卷之下

越後塩澤 鈴木牧之 編撰

江戸 京山人百樹 刑定

○沿海川さかづり

我國の但言ふ蝶をへつらうといふ沿海川のやまゆめはさかづりといふ蝶の譜
の虫の羽化する所大なるを蝶といひ小なるを蠶といふ本州其種類多
草花も蝶小化する事本草ゆめをえり蝶の和訓をかきひらてといひ新撰字
鏡ゆめをえりさかづりといふ名美い未考をさき前ふりて沿海川ゆめ春の
彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺をさきとて羽もさきものなり群る
か高さ一丈あり兩岸を限りて川下より川上の方(飛行その形状花のさ
きとゆめいさかづり幾里ともる流るる霞をひきさるるごとく朝より夕まで巻く
川上(さかづり)のさかづりをあつむ川水もえをさかづりといふ

しるすに水田のさしつゝ流るるそのまゝ白布をりぬらして其様の形
 燈籠の如く白燦と我國の大小の川と幾流もわらう此流海川のほとりて
 毎年ふらむ此事のもも奇とせしむる天明の洪水以来此事絶てり

○本草を按ずる石菴一名を沙野とすその山川の石上の附く蘭をり春夏秋
 化して小菴となり水上の飛ぶとりの件のさつづい海川の石菴のすゝ其
 種を洪水の流るるにやまふとて他国にも石菴を生ずる川のほとり
 の人もあるとて余此標をりぬらして遠隣の老婦若きころ流海川のほとり
 嫁せし人ありぬ多事由問ひぬその老婦の語りし事をり記せり

○鮭の字の考

新撰字鏡との字書は本朝の僧昌住といひ一人今より九百四十年あり
 のむら寛平昌泰の年間作りたる文字の吟味を著る書にむじよりの世の
 学匠より傳(字)に重宝せしむるを近き頃村田春海大人右の書を

京都より購得てのり享和三年の春創り板本とす一世の重宝とるりて
 より右の学者の机上へ置は實小春海大人の賜りけり右の字鏡ありて
 后二十余年を歴て源の順朝臣の作りたる和名類聚抄ありき是も字書と
 元和の年間那波道田先生創りて板本とせしむる後板まで和名抄ありと
 后五百余年ありてをへて文安年中下学集との字書ありきと元和三年
 創りて板本とるりより下学集より五十三年の后明徳五年林宗二明人節用
 集を作り文龜のころの活字本ありきといは引節用集の推輿と其右
 百八十年を歴て元禄十一年小模寫昭武駒谷山人が作りたるは人書言字考
 一名合類節用集との板本のり宗二が節用集を大成する物ありといは引
 平他字類抄のり下引本朝の字書のり大低八件のり今俗用する
 節用集は新撰字鏡和名抄を先祖の父母とて右の八皆其子孫に是は鮭の字
 の事を言んとす童蒙の爲先りけり ○新撰字鏡奥の部は鮭の字

節の用ひざる家々一又病人にも喰も他国より賤賤なりといふ事あり
るゆゑゆやあらん

○ 鮭を出る所

鮭ハ今五畿内西国より出る所を聞て東北の大河の海へ通ずるゆゑ鮭あり
松前蝦夷地最多一堪引とて諸国へ通商ハ此地ハ限り次ハ我々越後
小多一又信濃越中出羽陸奥へ常陸ゆもありとさうつとさうりの国の鮭ハ
その所の食ふあつる不足るのを通商するふらう守江ハ利根川ありと
りども稀なるゆゑ鮭ハ初鮭の價ハ比まこと我國より毎年七月二十七日
所とふある諏訪の祭りの次の日より鮭の價をさしめ十二月寒のあけを漢
の終りとて古志の長岡奥沼の川口ありゆゑ漢一なる一番の初鮭を漢
師長岡へさすつと六例とて鮭一頭ハ二頭を二尺 朱七俵の價を賜ふは五
定めのり使のをも下す 鮭の大きハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸と
男魚女魚の名ありゆゑ子あるゆゑをさすゆゑの價貴一五番まで奉りて
后を賣る初鮭の貴きゆゑかりてあつることを賣るる江戶の初鮭魚
小をさすゆゑ初鮭ハ光り銀のごとく小して微青なり肉の色紅をぬ
りするが如し仲冬の頃ふゆゑ身ハ班の錯りて肉も紅の薄し味もや少
まり此国より川口長岡のありを流る川にて捕りたるを上品とて味ハ他
小比をさす十倍に僅小其地を去まば味ハ美なるゆゑその味ハ美なるものハ北海
より長江を流りて困苦なるの度小ありゆゑもあつらん 魚急浪不困苦ハ味
ひるるゆゑ甘美のゆゑ北海の魚の味ハ厚と南海の魚の味ハ淡の差ハある
がごとし

○ 鮭の始終

我國の鮭ハ初秋より北海を出る千曲川と阿加川の兩大河より出ること
其子を産んとて女魚小男魚隨てのゆるゆる事ありて五十余里河小在

滋海川奇蹟之圖



とも此子鮭雲消の水不随ひて海不入る海不入るのち裂る腹合し七腸を
 ごとく煖火の火の煎みよしく如く鮭の漬ハ寒中を限りとも寒あけて捕ま
 崇をまるとりひつゝ我々若く時水村の一農夫寒あけて后瀬のとりよ
 鮭を奪ひてを喰ひて熱する事三日ふて死する事ありまむばたりとの
 口の碑の説も証ぐるを又ふる産するをとりてをともむばその家断絶ま
 ひはる鮭の大より三尺四寸ふあまるものなりは年々相を腹ましく長し
 るん我が若年のころハ鮭もまこととてなるゆゑその價もりやうりハ近年ハ
 捕る事少くもあ價もりのつゝもいふ倍せり年々工を新ふて煖まるゆ
 捕減しるるん女奥の大より六觔一升もあり小より三四合ふまむは江
 多くしてあつゝ塩引と唱ふる鮭鮭と越後の鮭ハ一品別種なる物なり
 或物産家のりり何ハ生ると海不成長まことむり海ゆく細小入
 なる事なり其始終をわく小鮭ハ鱗族の奇奥といふ也

牧之常ふあつゝ寒気の頃捕る鮭と男奥の白鮭とをま
 へ鮭居る川の沙石ふ包を瓶やうのものふらうし入と鮭を
 国の海に通る山川の清流ふかの瓶ふらうし入るをらうしを沙石
 のまいたりのうしひるる如くふらうしあは此川もく鮭よくとも
 三年捕る事を自禁むる鮭を生せんもあつゝ生せん国益
 ともふらうし
 江の白鮭はわらうしものをらうし
 ともふらうし

○打切り並ふ

北海新泻の海門ふあつゝ大河と阿加川と千曲川と
 千曲川の水源ハ信濃越後飛騨の大小の川ともまむ流と併て此大
 河をまむ越後ハ妻有上田の二庄をまむと奥野川の急流をまむ奥沼郡
 敷上の庄川口驛の端ふらうし信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

中央をうらむとて海不入信濃の流ハ滑り越後ハ清一信水ハ犀川の濁水
 あるゆゑに鮭初秋より海を出て此流ハ坂を蒲原郡の流ハ底深く河廣也
 大綱を用ひて鮭を捕るかの川口驛より上上田妻有のゆゑに打切といふ
 事をなすべく鮭を捕るその仕方ハ夏の末より事をなすゆゑ岸根より川中
 丸木の杭を建つて糸横木をとえてまゝ透間より竹箆をこき一々堀のおらふ
 一川の石をよせりけて力とるまゝ長さハ百間二百間ありて周圍形ハ川の便利
 小舟ハ船の通路ハこゝを除き一障りをもたせ又通航の路印を建てる夜の
 為とてとてふつとふ物を箕下ハるゝ鮭の入るまゝかゝるゝかゝるゝ
 此つらの作りやうハ竹を箆ふもて末を縛一鮭の入るまゝ口の方ハ
 竹の炭を作りつけて腰を平一地ふつて方ハひも上ハ丸く一腰ハ彭張あり
 長さハ五尺なりと鮭入らんとまゝ口廣がるやうふらふ功ハ作りたるもの
 こととてつとふハ筋とらふまゝを濁り記とるらん田舎言語ハ古言のまゝを

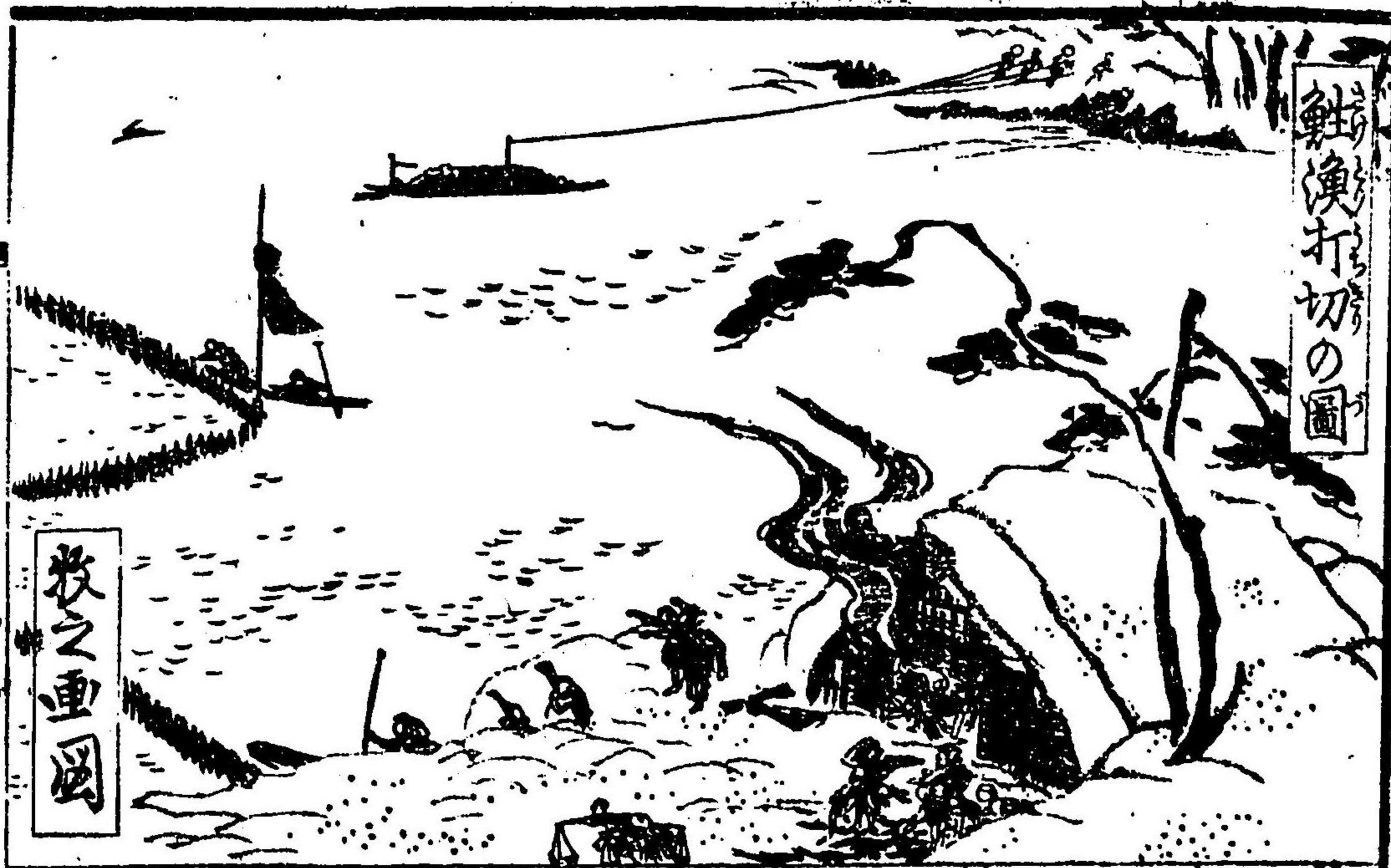
らひつとむりまゝのまゝのまゝの清濁をとりちるゝ物の名もどか
 するも多一阿加川を鮭をよせりて此打切を作るハ幾なるの費ある事也多漁師
 ども語らひあひまゝなるや打切なる岸ハ假ハ小屋をつくるゝ漁師ども
 昼夜らふありて夜も寐せし鮭のつかを待て七月より此業をなす
 て十二月寒明も一連のりのかりゆく此小屋ありて鮭をよせり此打切ハ川口を
 一番とて水上一十五番までありらるゝの持とて川口その境目ありて
 なるを厳重也○さて鮭ハ川下より流小舟より打切ありて船のように入
 所ハ流と打切小舟せりて小滝をよせりて流小舟のや大く打切の
 ようなるやうかかぬとて流小舟のや大く打切の
 する所ありて流小舟のや大く打切の
 りの腰ありて出るものなり○さて小屋ありて流小舟のや大く打切の
 をなすりて流小舟のや大く打切の

大木を二ツ並べてつとむる
 ○船の作りは舟
 を用ひて

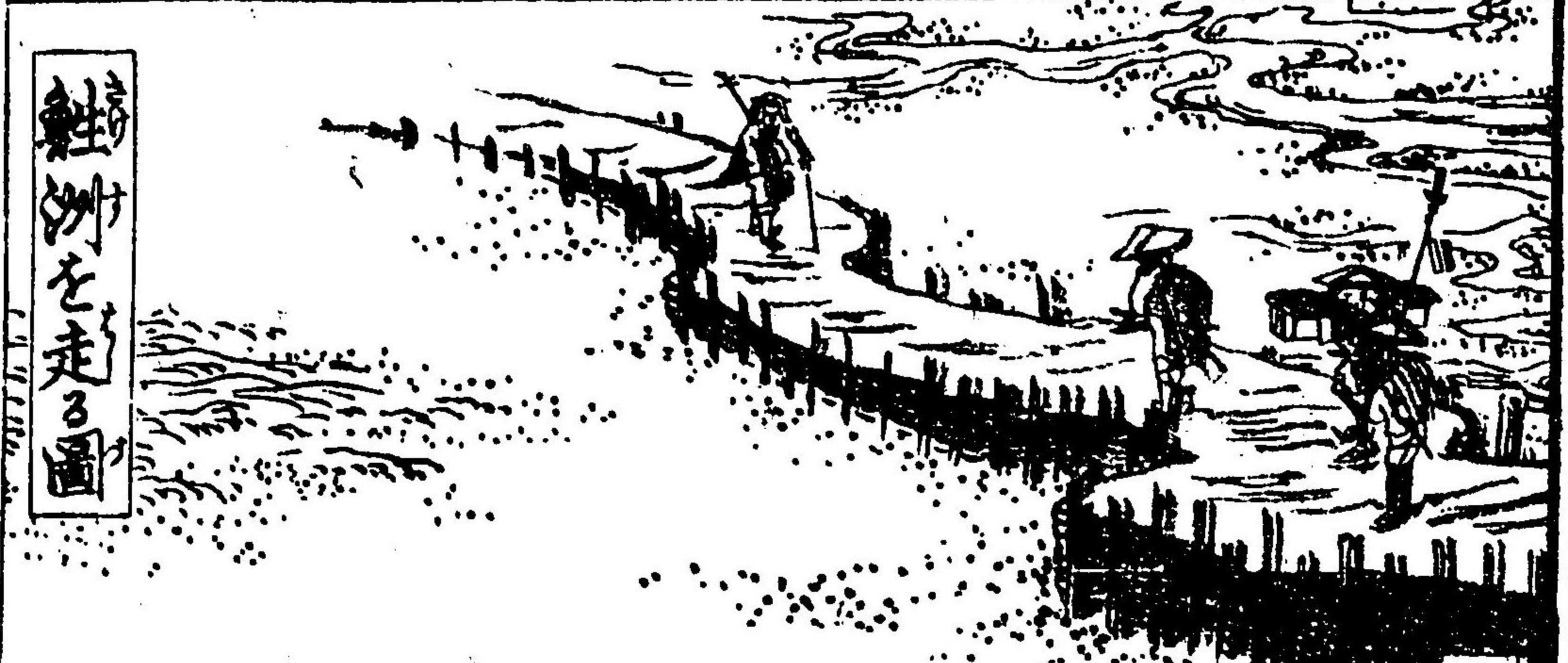
絶壁松網の圖



鮭漁打切の圖



救之重圖



鮭洲を走る圖

魚の群



かり炉火を焼くもつらふものゝつらふことなれば一がきつて人待君より
 小時うしむるも飯のちしめしをたのむるにむづかしの世にひつりふつのも
 さまかなしむるもええ持するにうきをうきへ下をうきむつのもよへい
 ちうつ夫のきびしむるもええむるものゝつらふものゝつらふに茶をい
 むちちのむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 むつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 のつら焼残りてものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむる
 ちうつり架もちうつ夫の深淵の底にうきうきむつりむつりむつりむつりむつり
 夜の早瀬ふちうつ手足凍え助りむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 むつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 を投んとちうつ又かむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり

養ひのむつり手をひき上ふ立手から死むるものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむる
 むつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 哭ふものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむるものゝつらむる
 ふつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 死骸をうきむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 づつりむつり

○総滝

総滝と新河の湊より四十余里の川上平原川のやま野村の村にあり
 の流ふあり信濃の丹波島より新河を流る河の流をうきむつりむつりむつり
 むつりその総滝と川をうきむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 むつりむつり水中ふあむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり
 むつりむつり水の中ふあむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつりむつり

人望して狭うらぬやぶらぐや松のうぐいすに我が上越後八名をよぶ奇岩の
りき中ふこまもとの一ツと此は梓岩の氷柱を我が国の人も自らをかき
そむきそのつらもまゝ下りたるやぶらぐの長き六丈をより太さ八寸
もあふ一掃する形状ハ燧燭のうぐいすたるやぶらぐの里地のつらもま
曲種くのうぐいすをより水晶もてエの作りやうぐいすのうぐいす
るや嶽の暉たるものふ比ぶとやうと此清水村の里正阿部翁のまのがより
てまぬ右のつらもまゝ我をよぶやぶらぐのうぐいすのうぐいすのうぐいす
此清水村の阿部翁のまのがより一掃する阿部右衛門の村々子孫に世々清水越
の関守よりとふ長尾伊賀守の城跡あり

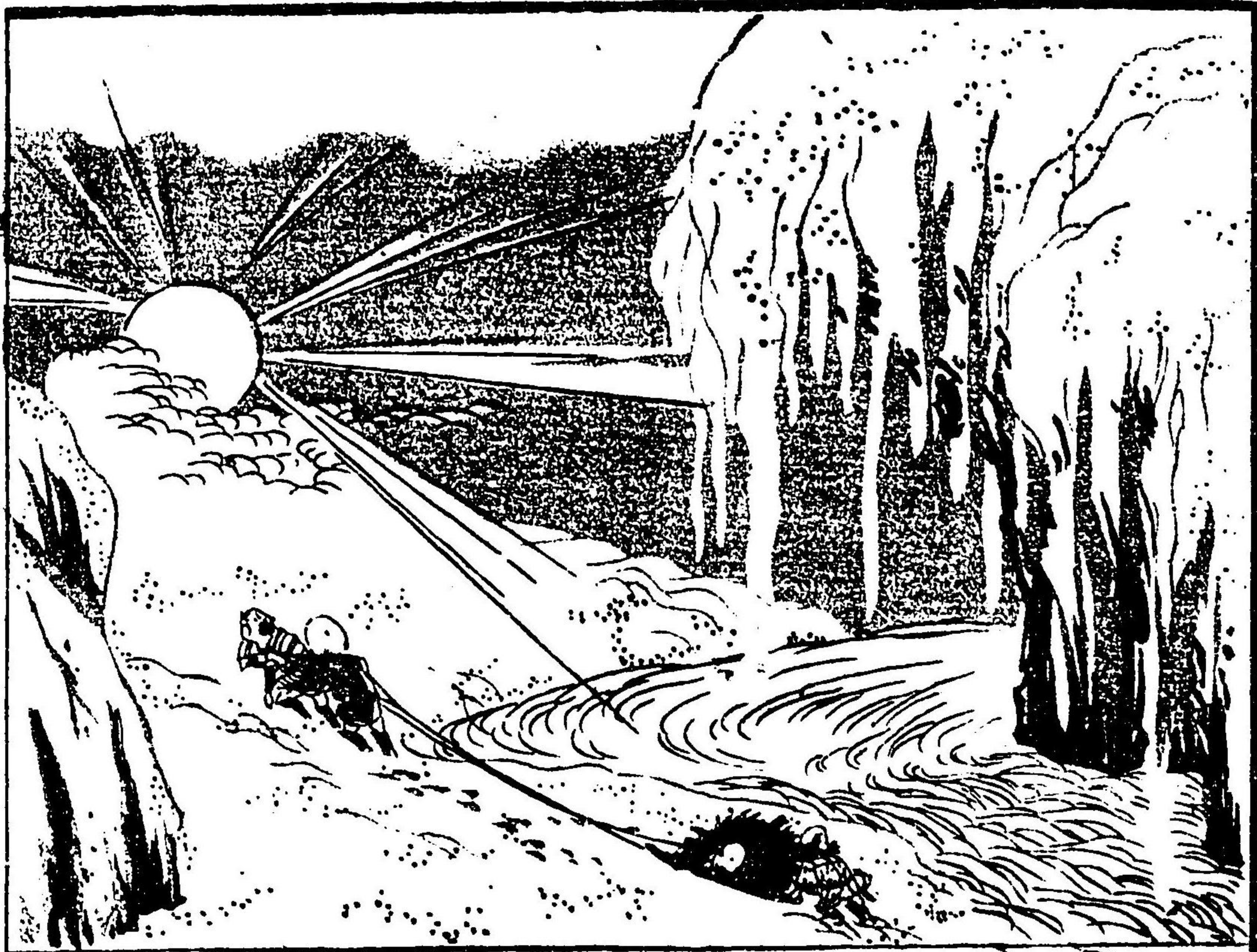
○滝の氷柱

我が上越後の山岳つらもまゝ滝多し滝あり所ふ夏木の大樹のて春ふりより
枝のつらもまゝ雪もつらもまゝて葉をいよぬ木の森をよりとるふ滝の氷柱の

潤ひに津より氷柱とより玉簾をくけ用ひたるやうのうぐいすも又
うぐいすのまゝとてまゝこの滝もまゝ氷柱とより玉簾の内ふ滝
をかきまのりよる四辺ハ亂瑠璃細玉の雲中へかの玉を掛よる山岳のうぐいす
かゆりたる奇景も瀬師越夫のやうなる人稀とてまゝを暖國の人ふまゝ
りふらぐのうぐいすもまゝてかきぬ山岳の庄ハ山越たる時目前ふ
るたる也

○雪中の寒行者

我が家ハ江戸ふ二とを居る職ありくまゝより一ふ江戸ハ寒念佛と
て寒行をよる道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴ヶ森千住ふりり刑
死の回向をよるまゝそのまゝハ股引草鞋ゆきあふふ着てつらもまゝの文
寒中裸参りたるふのり家作あつたるまゝの職人の若人らもるるやう
そのまゝハ常より長く作りたる提灯ハ日参りたる文字をよるまゝ



笠掛岩大氷柱圖

寒行者威徳之圖

三言卷之十一

文治四年

笠掛岩大氷柱圖

十一

文治四年

家よりしりぬるにさうりか回向せし事をも行のしる事なれどもさうりか不幸のつて
 目のさぬりゆへに行者のまじるをまじりてのしる事なれどもさうりか不幸のつて
 待て寒念佛寒大神まゐりの苦行ありし一件のごとくしてさうりか他國にさう
 り江守の寒念佛練もあつたさうりか不幸のつて無にかる苦行をさうりか
 やその利益の灼然事を次ふまうしつ苦行して祈るるさうりか神佛も感
 應ある事を童蒙も示せ

○寒行の威徳

近來の事ありき我が住攝澤より十町あり西南ありて田中村あり
 のり此村右の寒行をさうりか者ありけりある日米俵を背負ひて五六十町入
 てさうりか中村よりさうりか入るその道は三國街道より入る一も數一もさうりか雪道は
 人の踏らざる跡のまをさうりかさうりかさうりか廣き所も道は一條めて其外
 をさうりか腰をさうりか雪もさうりか入るさうりかさうりか重荷もさうりか持たるはさうりか武

家よりしりぬるにさうりか一足踏退てさうりかさうりか道を譲るる雪國の習ひか田中の者一人
 の武士もさうりか重荷もさうりかさうりか一足踏退てさうりか武士の声を
 ありさうりか今ひと足さうりか重荷もさうりか雪もさうりか
 おもひさうりか無礼のりか肩をさうりかさうりか俵を背負て
 さうりか雪の中へ倒れさうりか武士も又人か殺らさうりか如
 倒れさうりか田中の者あり早へ起て後にもさうりかさうりか
 田中の者ありさうりか武士の雪中へ倒れさうりかさうりか審立よるさうりか
 ぞ病平さうりかさうりか武士はさうりかさうりか
 福と病人ともさうりか手を株へ引起さうりかさうりか手をのびさうりか抱えお
 こさうりかさうりか橋力のさうりかさうりかさうりか重き事大石の如く
 りて身を動かさうりか不思議と驚怖るをさうりか武士さうりか事ありさうりか五体
 さうりか動へ事ありさうりか田中の者ありさうりか米俵を背負ひさうりか

まど心えりてて立飯りぬ

○斯くその黄昏おひりて源教ハ常より心して佛ハ供養して清らけり
り一徑を誦し居たり七兵衛もやまらぬ誦しをりて七兵衛ハ物をとませ
さて目もふきけき佛壇の下の戸棚ふらふきをしせ親くべき節孔もありさて
佛のとも一火も家のものごとと出ふる一佛のまゝハ新着を志して幽霊を居
らざる所より入り口の戸をまきと一わけなき研とえたる剃刀にてうを用意
し今やくと幽霊を待居たり此夜ハあつも雲ふらりてまきと一わけかきたる
戸口よりもらりてこむ風おあり一もまきとまきとあま戸をまき一炬のまきふあり
て戸棚の七兵衛ふらりてう。蒲團ハ志しきまきとありてこふありて眠りあふ。い
てまきとせん幽霊をえんとまきと心ふ念佛もるのこ御坊をせせをいづてこ林
こまきとあらり。軒の音より一まきとふらりて幽霊をえんとまきと入る音をいづ玉もる。
とのひつて手作とて入ふらりひらる煙草のめりて刺すもや吸あまきと申ハ念

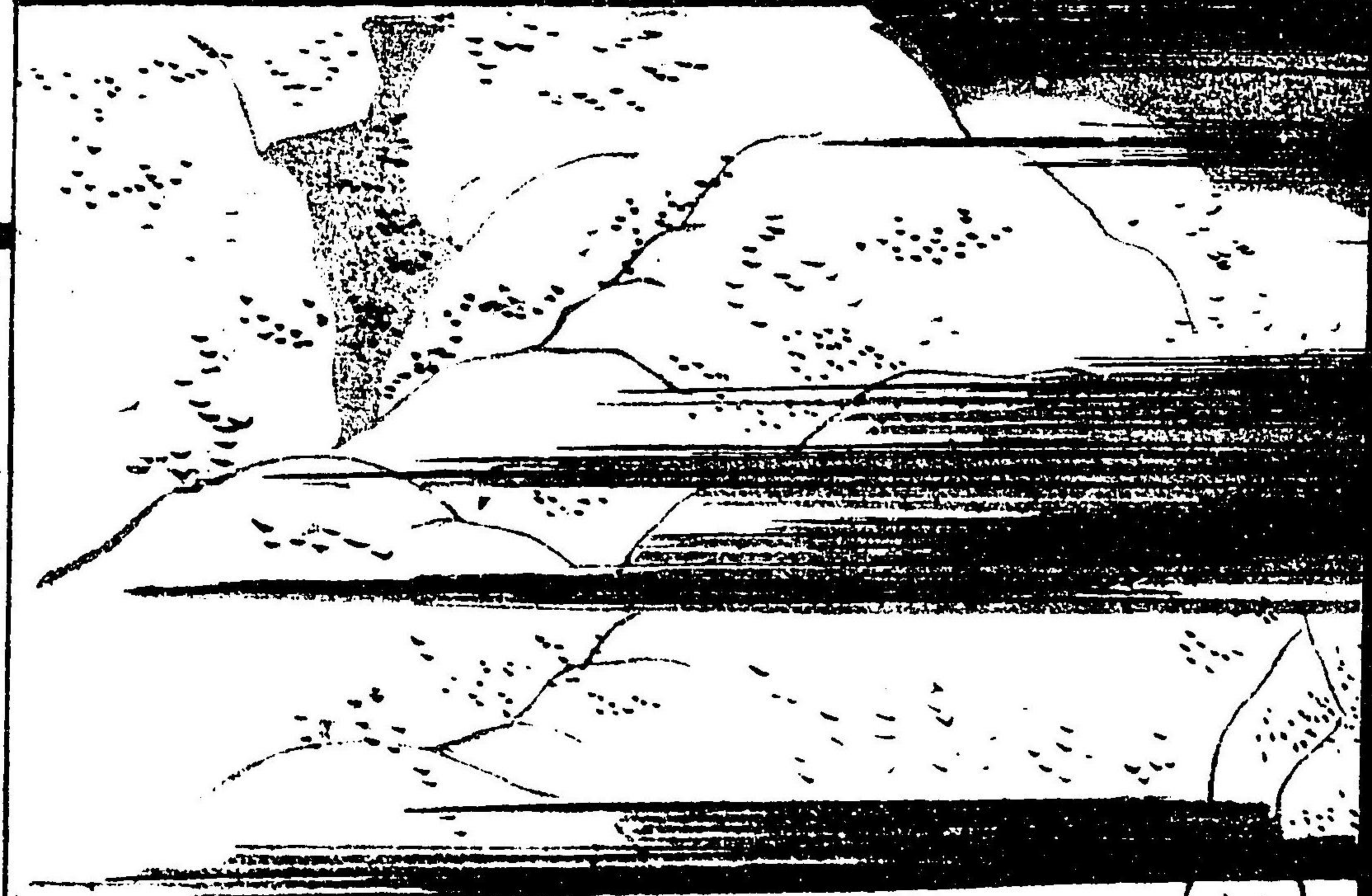
佛を噴まきと鐘の枕まきと一まきと懸をぬきと居たり雲ハ雲蒸ふありてまきと
音のみのこ四隣ハけまきとまきとて声のこや時まらりけり ○さて幽霊ハ影も
りえを源教ハがふ温りと睡眠をりて居眠りりて終ふ倒れんとて目を
ひらきふか菊ハ幽霊何時も来りて佛ハ對ひまらけり新着の上ふせり頭を
低てぬりてまきと源教も戦慄せしこまきとまきとまきとまきとつていふ幽
霊ハかきとまきと源教ハまきと昨夜ハまきと源教手をとまきと
水をとまきと剃刀をまきとまきと打まきと一まきとめりてのまきとめりて
まきとまきと源教ハまきとまきと一まきとまきと一まきとまきと一まきと
髪のもまきとけり一まきとまきと一まきとまきと一まきとまきと一まきと
を指かかまきと一まきと一まきと一まきと一まきと一まきと一まきと
まきとまきと一まきと一まきと一まきと一まきと一まきと一まきと

雪中幽室之圖



雪景

文政堂



雪景

文政堂

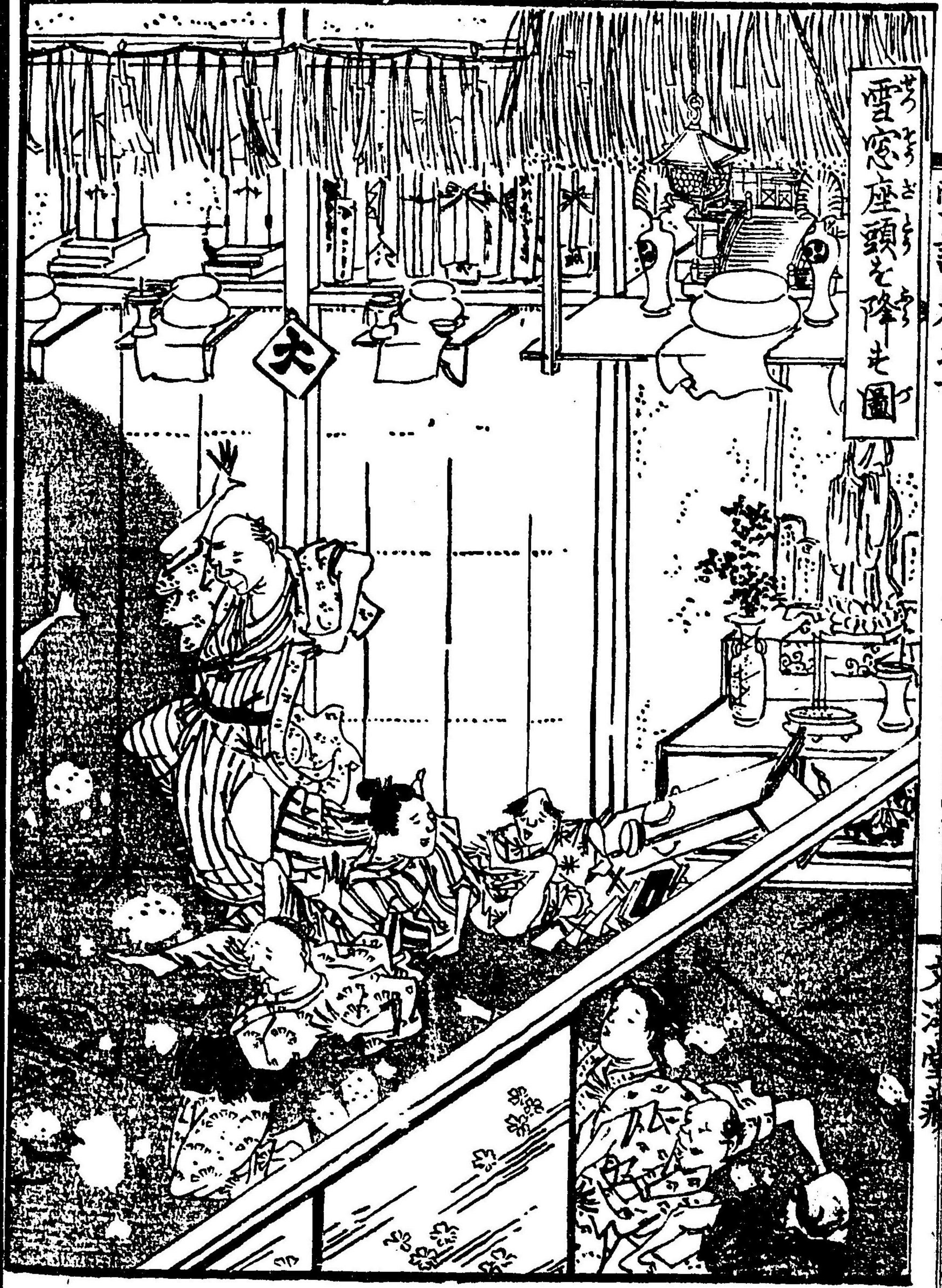


且つその妙あり山麓に慣る者、雪の足跡をたぐるとその跡をたぐりしに
 まる今朝のありもことごとく今も一ひのふとの時をたぐりしに三國嶺の北
 へいへ二居の人まげあ。の鹿もひきつてきたまひへひき鹿もひびがゆへに
 うへひのめをわのへ雪を備へていふに身をたぐりしに山カを
 さへ鉄炮手鎗又棒をもちて山カ入りうの足跡をたぐりしに随ひてゆへに
 鹿をたぐりしに人をたぐりしに逃れんとまひへ人のたぐりしに鹿の深田をゆへに
 ごとく終ひの進ひのめをたぐりしに剛要の入りしに身をたぐりしに
 山カゆへ刺殺もあつとぞとまひへ暖國ゆへにまひへゆへに

○洵り山の大猫

我が隣驛関ふちのき飯士山小続く東ふ阿弥陀峯とて熊まゝ山あり村の持
 定あり二月ふりう雪の降止る頃農夫ら山小推せんとも語らひゆへに連日の
 食物を用意一かの山カ入り野を見立て假小小屋を作りてを森取とまひ

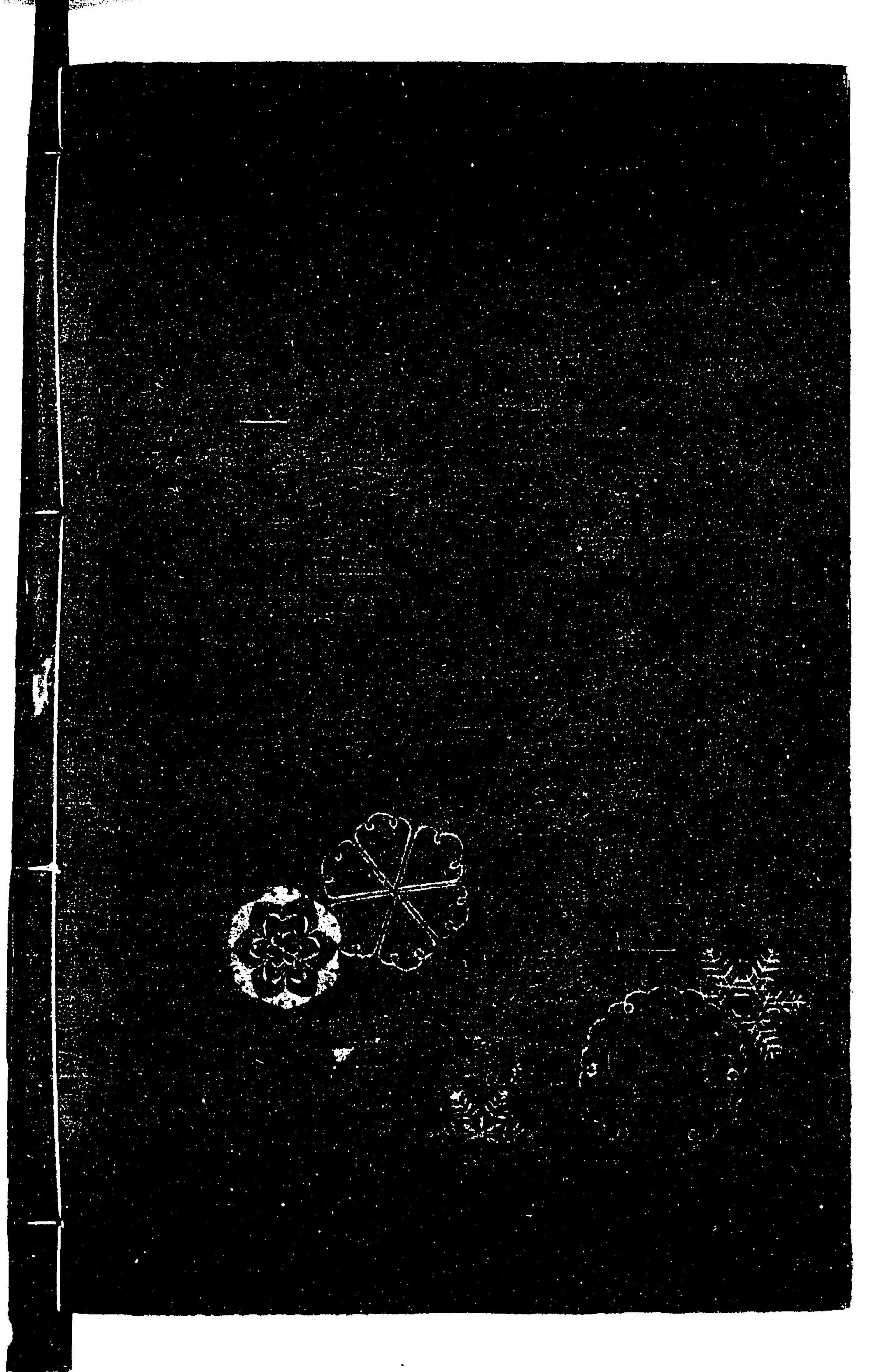
毎月てかしの木を心のまふ伐とりて薪ふつたり小屋のやとりふあまも積
 めま心ふ足るやぶふりしにまふそのまふ積かまて家小飯るこまを洵り山とふ
 山小とまひゆへに夏秋ふりしにまふ積かまて薪も乾ゆへに牛馬を駆ひて薪を
 家小運びて用ふあつと雪ふりしに所ハ雪中ゆへに山カ入りて推せる事あつとまひ
 ゆへに所為ゆへに我國雪のまふまひまひのしに右ふりしにまひ水たぐり谷
 川あまも山とふの教丈の下をたぐりしに翼のけまひまひまひとまひまひまひまひ
 藤蔓の大木ふまもひひらるが谷川一番下りるあり洵り山へ水汲の樽を脊
 ふへへ一息ひせまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 脊もひひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 このゆへに洵り山まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 なるゆへに洵り山まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ



愛窓座頭を降参圖

愛窓座頭を降参圖

愛窓座頭を降参圖



139
7
146

東 京 圖 書 館				
七 冊	一 四 六 號	一 架	二 九 函	地 理 類 和 書 門